Global human resources

農業で活躍

農家として開発途上国のためにできること

宮崎県で農園を営む佐々木正吾さんが取り組んでいるのは、作物や土が持つ力を最大限に生かした、人にも環境にも優しい農業だ。そのノウハウは海をまたぎ、途上国の人たちにも伝えられている。

「しょうご農園」代表
佐々木 正吾さん

悩んだ末の一大決心

美しい田園風景が広がる宮崎県都城市。10年前、佐々木正吾さんは夫婦でここに移り住み、以来、農業を営んでいる。「道路地図を片手に、農業ができそうな場所を求めて九州各地を回りました。宮崎には縁もゆかりもありませんが、地元の人たちは温かく迎え入れてくれました」。知らない土地で農業の道を歩むことを決断した佐々木さん。その転機は25歳の時に訪れた。

佐々木さんは、大学で環境保全について学んだ経験を生かして、河川や工場排水などの環境分析を行う仕事に就いた。ところが、働き始めて数年がたったころ、学生時代から興味があった農業への思いが再び強くなり、本当にこのままでいいのかと考えるようになった。そんなとき、頭に浮かんだのが青年海外協力隊だった。「会社を辞めるのは大きな覚悟が必要でしたが、自分がやりたいことは〝農業と環境の接点〟を生み出す仕事だと気付き、新しい世界に踏み出すことを決めました」。

派遣先は中米のコスタリカ。そこで、農協の職員に対して畑の土壌分析や肥料設計の手法を指導した。さらにもう一つの活動として、ずっとやりたいと考えていた有機肥料の普及にも取り組んだ。「コスタリカでは有機肥料はほとんど使われていませんでした。そこで、まずは実際にやってみて成功事例を作ろうと考えていたとき、一緒にチャレンジしたいという農家の仲間が出てきてくれたのです」。土が肥沃(ひよく)になり、作物が健康に育つ有機肥料の良さを伝えながら、地元の農家たちと一緒に取り組んだ結果、化学肥料を使わずにキャベツやレタスなどの野菜を収穫できたほか、無農薬栽培にも成功した。これは当時の同国では画期的なことであり、地元のテレビや新聞にも取り上げられるなど多くの反響を呼んだ。「実は、私は有機肥料を作った経験も有機栽培の経験もありませんでしたが、頭の中の知識とやりたいという願望だけで挑戦しました」。佐々木さんはこのとき、農家の喜びを肌で感じ、いつか自分自身でも農業をやろうと心に決めた。

たどり着いた農業の形

隊員時代の経験を生かして、ドミニカ共和国やエルサルバドルで有機農法の普及や環境プロジェクトの企画などに携わった後、佐々木さんはついに宮崎で農業の夢を実現させた。現在取り組んでいるのは、作物の栽培と鶏の飼育を組み合わせた「有畜複合農業」だ。農園で収穫された野菜や穀物の残りかすは鶏の餌に、鶏のふんは畑の肥料として活用する循環型の農業で、廃棄物などの無駄が少ないため、環境に優しい。もちろん野菜は化学肥料や農薬を一切使っていない有機栽培、鶏は薬剤や輸入飼料を使わずに放し飼いだ。

今では毎年、途上国からの研修員を農園に受け入れていて、発酵飼料の作り方や有畜複合農業の仕組みについて教えている。「隊員時代に、ノウハウの普及には農家から農家に直接伝えていくことが、一番影響力があると実感しました。そしてようやく、私もその農家の一人になれた気がします」と笑顔で語る佐々木さん。世界のどこの国の小規模農家でも実践可能な形として期待される有畜複合農業が、研修を通じて途上国の国々にも広がっていくことを願っているという。

「この研修は日本でのプログラムの後、コスタリカでも開催されますが、その講師を務める現地の農民グループは、私の隊員時代の仲間たちなんです。あれから30年近くがたった今、中南米地域の農家を支援するため、私たちはそれぞれの国で同じ研修に参加している―。これほどうれしいことはありません」。日本から遠く離れた地での出会いは、今も佐々木さんの心の支えになっている。

「しょうご農園」の研修に密着！

今年6月から8月にかけて、JICA筑波は、途上国の小規模農家の生産性向上や、環境保全の推進などを目的とした研修コースを開催した。中南米諸国から16人の研修員が参加し、埼玉、鹿児島、宮崎の農村地域などを視察した。その視察先の一つが、佐々木さんが経営する「しょうご農園」だ。研修が行われた一日に密着した。

まずは有機栽培を行っている野菜畑を見学

佐々木さんは、これまでの経験を生かして、全てスペイン語で説明を行う

続いて、飼料作りの工程を見学

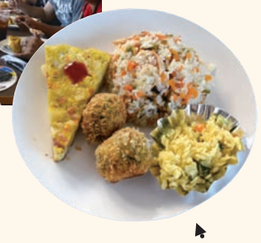
米、小麦、大豆などのさまざまな国産材料を配合して手作りしている。独自の方法で発酵させたこだわりの餌を使うことで鶏が健康に育つほか、生育が不十分な農作物も活用でき、無駄をなくすことができるという

1日に約150個生産される自慢の自然卵

「農業と鶏の飼育を組み合わせることで、安定した収入が得られ、消費者の健康づくりにも貢献できます」と佐々木さん

おいしい昼食

昼食は妻の和枝さんの手作り。農園の野菜、米、卵、鶏肉をふんだんに使った料理が振る舞われた



午後からは公民館で講義を実施

佐々木さん自身のこれまでの経験や、有畜複合農業の仕組みなどが紹介され、現地の実情を踏まえた真剣なディスカッションが行われた。研修員たちは口々に「ぜひ母国でも伝えていきたい」と話していた

佐々木 正吾　SASAKI Shogo
北海道生まれ。帯広畜産大学で畜産環境学を専攻。卒業後、環境計量証明事業を行う民間企業に就職し、1988年から青年海外協力隊としてコスタリカに派遣。その後、JICA専門家などを経て、2005年から宮崎県で農業を営む。現在、JICA研修員を農園に受け入れ、有機栽培と自然養鶏の組み合わせによる有畜複合農業に関する知識や技術を伝えている。